十二の扉

mikatuki98

　扉が目の前に現われた。　軽く押すと扉はあっさりと開き、そこには沢山のハツカネズミが居た。
「ネズミ先輩！」
　思わず声を掛けたが、全員がいっせいに「チュー」と返事をしたので、あまりの量の多さにビビッてとっさに扉を閉めた。
　扉を閉めるとベルトコンベアー式に次の扉が現われた。　同じように軽く押すと扉は「モー」と鳴きながら開いて一頭の牛が姿を見せたが、「モー」とは鳴かず「誰だお前は！？」と人間の言葉を喋りながらコチラに向かって来たので、怖くなって扉をおもいっきり閉めた。
　強く締めた反動なのか、扉は一回転して裏面が現われた。　元々同じ扉なので未だ牛がいるかもしれないと思い恐る恐る扉を押し開けると、そこには牛ではなく３頭のトラが頭を並べていた。
　張子の虎みたいで何だか可愛い。　恐怖心の代わりに好奇心で真ん中のトラの頭をトンと突くと、本当に張子の虎のようにウンウンウン首を振った。　あんまり面白いので左のトラから順番に頭をトンと突いて行き、一番右端のトラの頭を突いた途端、扉は自動で閉まってしまった。
　ガッカリしながら次の扉が現われるのを待っていたが、直ぐには扉は現われなかった。
『何だ、もうお仕舞いなのか。　つまんないや……』
　そう思いながらネズミと牛とトラのことを思い出していると、ふと閃いた。
『そうだ！　次は絶対ウサギだ！　だって＜ね・うし・とら＞と来たら次は＜う＞。　そして＜たつ･み･うま・ひつじ・さる・とり・いぬ・い＞で干支の動物が扉の向こうに待っているのだ。
　だから扉も順番に回って来る。　これで決まりだね！』
　ところがやっと現われた次の扉を勢いよく開けると、そこには一面の大海原が広がっていた。
「えーっ！　海？」
　寄せては返す波を見ていると、いつの間にか扉から一歩中へ入り込んでいた。　そして一歩、また一歩。　波に引き寄せられるように海に近付いて行く。　そこへ一気に大きな波が来て全身がすぶ濡れになった次の瞬間、身体は海中深く沈んでいた。
　しかし透明の枠に囲まれた空間に居て濡れることもなければ、息苦しくなることもない。　そして枠の一箇所がまた扉になっていた。　しかしこの扉を開ければ海水が入り込みきっと溺れて海の藻屑だ。　そう思うと扉を開けるのが躊躇われたが、勇気を振り絞って開けた途端、目の前をゆらゆらと泳いでいたタツノオトシゴが突然、龍に変化した。　龍の背中に乗せられ海中を一気に抜け出し天に舞い上がる。
「わわわっ！　凄い！　ホンモノの龍だ！」
　天にも昇る気分とは正にこのことだと興奮している最中に、無情にも呆気なく龍の背中から振り落とされてしまった。
　どれだけ龍は天高く飛んでいたのだろう？　落ちて行くのにとても時間が掛かり途中で空中に浮ぶ扉を何度も見かけた。　しかし、どの扉にも手をかけることが出来ないままに落下して行く。　そして遂に地面に叩きつけられる！　と覚悟した時だった。　宙に浮いている扉がすぐ目の前にまた現われた。

　もうこれは扉を開けるしかないと思い、不安定な身体でやっと扉を開けると、もの凄い騒音が耳をつんざいた。　思わず耳を手で塞う。　するとピタリと音が消えたので恐る恐る耳を開放すると、今度は単調な音が聴こえてきた。　「ミーーーン　ミン　ミン　ミーーーーーーン」　もの物凄くスローに鳴く蝉だ。　あまりにスローなので体内のリズムが崩れて行くようで不快な気分になった。
『嗚呼、ここから出たい……』
　そう思った次の瞬間一陣の風が吹き、扉が目の前に降ってきた。　妙に薄っぺらい扉だが開けてココから逃れるしかない。　きっとココよりはましな場所に違い無い。　いや、そうでありますようにと念じながら扉を開けた。　するとそこには目も冴え渡る緑の草原が広がっていた。
久し振りに思いっきり空気を吸える。　いつの間にか馬の背に乗りひたすら草原を駆け回っていた。
「ヤッホ～～～」
　いつ伸びたのか？　馬の尻尾に似た長い髪を靡かせながら軽快に駆け続ける。　どれほどの時間と距離を駆け回ったのか分らない。　馬の走りを止め、雪崩れるようにクタクタになった身体を草原の大地に横たえて一眠りした。　ふと目が覚めると青空には雲がぽっかりと呑気そうに浮んでいる。
「ひとつ・ふたつ・みっつ・よっつ……　」
　雲を数えれば数えるほど数が増えて行くようだ。　そして１００まで数え終わった時、地面に横たわっている身体のすぐ上に再び扉が宙に浮くように現われた。
　せっかく心地よかったのにまた移動するのかと思うと少し面倒に思えたが、扉が目の前に迫ってくるので開けない訳にはいかなくなって仕方なく扉を押した。　すると今し方数えていた雲にそっくりの羊の群れがそこにはあった。　どうも丁度１００頭いるようだ。　あっという間に自分の周りに群がって来た羊が何だかうっとうしい。　それにもの凄く暑い。　さっき馬で草原を駆け回って疲れていたので、牧羊犬のように走って追い払う気力も無い。
　「みんな去れ～～～！」
　仕方がないので精一杯の大きな声で叫んだ。　すると面白いように羊たちは遠く遠くに去って行き、遂に一頭も見えなくなってしまった。
「はぁ～　去ったな……」
　ふと声を漏らした途端、再び扉が現われた。　しかし今度は小さな小さな扉だ。　今まではずっと背丈以上ある扉だったのに、今度の扉は掌２つ分のサイズだ。　こんなに小さな扉だからきっと小人の国でもあるのだろうと思いながら扉を開けると、小さなものが扉の向こうからコチラを覗き込んでいる。　何だ何だ？　とコチラも興味深気に覗き見ると、それはリスザルだった。

「可愛いな」
　そう言った次の瞬間、リスザルが扉の向こうから出て来て左の肩に乗っかった。　何だか世界名作劇場のアニメの主人公になったような妙な気分でいると、バサバサと羽音を立てて大きなトリが飛んで来た。　そのトリをよく見ると飛べない筈の鶏だ。なのに悠々と飛んでいるのに酷く驚いたが、もっと驚いたことにまるで猛禽類のように鋭い足で身体を捕まえられあっという間に

空中に舞い上がってしまった。
『一体何処へ連れて行かれるのだろう……』
　不安になっていると空中にまた扉が現われた。　ところが鶏は体当たりでその扉に突っ込んでしまった。
「痛っ！」
　扉が開くと同時に地面に落下した身体が何かにぶつかった衝撃があった。　しかし痛かったのはぶつかったからではなく、鶏の足が落ちるときに長い髪に絡まって引っ張られたからだった。
　それにしても、一体何にぶつかったのだろうと思い辺りを見ると、大きな犬が地面にへばり付いていた。
「クゥ〜〜〜ン」
　情け無い声を出している。　どうも落下したときにぶつかったのは犬だったようだ。　可哀想に下敷きになった犬。
「ごめんごめん。　痛かったでしょ……　」
　クッション代わりになった犬の身体を撫でていると、家人が出て来て「今から猟に行くぞ！」と犬に声を掛けてきた。　一体何の猟をするのかと思っていると「お前も来るか？」と家人に声を掛けられた。　お前？って自分のことだろうかと思い、「私ですか？」と言ってつもりが「ワゥ？」になった。
『あれ？　可笑しいぞ』
　もう一度「何の猟ですか？」と聞いたつもりが「ワゥワゥワン？」になった。　それからあれこれ試しに喋ってみたが、全部「ワオウエイ」の発音になる。　完璧に犬語しか喋れなくなっていた。
　これは困ったと途方に暮れてみたが、ココに居ても仕方がない。　とりあえず猟について行く決心をした。
　すると家人は山へ向かわずに、いつの間にかへたばっている犬の側に現われた少し歪んだ扉を開けた。　何のためらいもなく扉を開ける家人。　その後を犬と一緒について行くと、そこが既に山の中だった。
『これは便利だ！　楽して山に来れたな……』
　関心していると突然、家人が鉄砲を撃ったのでその音にぶったまげて腰を抜かしてしまった。
　ところが向こうの方から音に怒りまくった猪がコチラへ向かって突進して来ている。
『わわわわわ！』
　あわやこれまでか！　と最期に絶叫した。
「ワオーーーーーン！」
　情けない自分の犬声と共に目覚めると身体はベッドから転げ落ち、猪のプリント柄のパジャマが肌蹴てお腹が丸出しになっていた。　最期の雄たけびが犬語だったことはショックだったが、それが夢で良かったと感謝しながらベッドに戻った。
　暫くベッドの上で夢での様々な情景をボーっと思い出していると、肌蹴て冷えてしまっていたのか、お腹がグルグル鳴リ出したので慌ててトイレに駆け込んだ。　ところが先客の弟がタイミ

ング良くトイレの扉を開け、おもいっきり顔面を強打してしまった。
「痛っ！」
「あ、わりぃ」
　激突した瞬間、一歳年下の弟の干支が亥年だったことを忽然と思い出した。
「クゥ〜〜〜ン　夢の続きか……」
　情けない犬のような鳴き声が現実にも出てしまった。　了